

歴史から学ぶ大切なこと

歴史を振り返ると、様々な差別的場面に出会うことがあります。現代の私たちが知らずれば、何かと欠点が多いように思われがちな過去の社会ですが、その社会なりに、人間として正しいとされる事例があったのです。その一例を上げて、時を超えて共通する大切なことを考えてみたいと思います。

☆

今から四百数十年前の戦国時代末期のことです。ある日、二十五歳の画師・長谷川久蔵（きゆうぞう）は京都清水寺の本堂に立っていました。力作の大絵馬がようやく完成し、晴れて奉納がかなったのです。

久蔵は、当代の画伯と称賛された長谷川等伯（とうはく）の長男です。等伯は、能登国の戦国大名に仕える下級家臣の子として生まれ、幼くして他家の養子となりました。三十歳のころ、養父母の死をきっかけに幼い久蔵を連れて都へのぼり、絵屋を営みながら生計を立てていました。絵屋とは、扇や着物などに絵をかくことを仕事とする町絵師のことです。やがてその才能が認められ、干利休を施主とする大徳寺三門の壁画制作を依頼されたことから、ついに有名な画師の仲間入りを果たしました。久蔵も画才に恵まれ、等伯の跡継ぎと期待されていたのでした。

清水寺に掲げられたその絵馬は、久蔵の力が十分に発揮された作品と思われました。鎌倉時代の勇将・朝比奈三郎が、酒宴の席で曾我五郎の鎧の草摺（くさず）りを掴み、力争いをする場面を描い

た、三畳の間ほどもある大作です。久蔵は感慨深くじっと見上げていました。そこへ染物屋の下女がやってきて同じように見上げ、「おかしな絵だね。」とつぶやいたのです。久蔵は、その女が発した思いも寄らぬ言葉に耳を疑いました。「何がおかしいのだ」。「あの鶴の描き方がおかしい」と。朝比奈の袴（はかま）の襷（ひだ）に、舞鶴の紋が平面的に描かれている不自然さを、その女に指摘されたのです。つまり、折れ曲がった面には折れ曲がった鶴の姿が見えるはずだ、というわけです。「しまった…」と久蔵は後悔しました。しかし、いったん神仏に捧げた絵馬を下ろすわけにはいきません。清水寺の近くを通るたびに、久蔵の胸は痛みました。やがて、この絵馬のことは町中の評判になりました。

☆

この話は、江戸時代の俳諧師（はいかいし）・井原西鶴が著した「西鶴織留」（さいかくおりどめ）という書物に収められています。「下女」とは、召使の女性のことです。男性の場合は下男。男女あわせて下人といわれました。同じ江戸時代に書かれた別の書物には、下人のことを「奴隷」と記した例もあります。何れも、期間を限って他家に住み込んで主人に仕え、相続、売買、質入などの対象ともなっていた人たちです。全国には、下女・下男と呼ばれる人たちがどれくらいいたのかわかりませんが、当時の身分制度の中で社会全体を献身的に支えた人たちでした。

西鶴は、摂津国大坂に町人の子として生まれ、貞享・元禄（一六八四〜一七〇三）のころに文壇で活躍した人です。

☆

身分制度が存在した社会にあつて、西鶴は、なぜ久蔵と下女のことに着目したのでしょうか。

現代には、前近代社会のような身分制度はありません。しかし、差別事象はあつてを絶ちません。何故でしょうか？西鶴が、身分や地位や立場を超えて「不条理をみぬくこと」が大切なことであるといいたかったとするならば、今日なお差別が後を絶たない現実、私たち自身の「真実をみぬく」まなざしの弱さを教えているのかも知れません。

大切なこと、それは「正しいことを正しい」と「まちがいはまちがいに」と見ぬき・表現すること。不合理な差別を一日でも早く解消するため。

《写真》（注）天正二十年（一五九二）に奉納された長谷川久蔵作「朝比奈草摺曳図」絵馬は、近世初頭の名作で美術史上貴重であるとして、一九八五年に国の重要文化財に指定され、現在は清水寺の宝蔵殿に保管されています。

